

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 167

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 3321. 脱学校化・脱組織化された学びと問題創出について
- 3322. 自己超越と主体客体について
- 3323. パターン認識と作曲実践
- 3324. 教育哲学者の話を聞く夢
- 3325. 教育哲学に関するジャーナルの精査
- 3326. ルーミーの詩集とシュタイナーの書籍の往復
- 3327. 記述を嫌う体験主義者の矛盾した行動
- 3328. 不老不死の薬を浴びる夢
- 3329. 瞬間性を尊重した作曲実践
- 3330. 記述を超えた日々の生活
- 3331. 転調による無意識の内容物の客体化と治癒・変容
- 3332. 他者理解と一なる心の可能性
- 3333. 今日から今から
- 3334. 理解を生む原動力
- 3335. 若さと発達について
- 3336. 本日の読書より
- 3337. 形を生み出す実践活動
- 3338. 今朝方の夢
- 3339. 今日の活動内容
- 3340. 休息と目次学習

今日は早朝から随分と冷え込んでおり、昨日よりもヒーターの温度を高くした。空は相変わらず雨雲に覆われたり、それが晴れたりを繰り返し、雨と晴れが断続的にやってくる。

午前中の読書がはかどり、早朝に計画していた二冊の初読を終えた。二冊のうち、“Freedom and Beyond (1972)”を読みながらふと思ったのは、自分の学びは脱学校化が完成され、学びが完全に生活の一部になっているということだった。

学習というのは決して学校の中だけで行われるものではないのだが、どうも現代社会においては、学習というものが学校の中だけの営みとして見なされがちであるように思う。いや厳密には、企業組織も含めると、学習というものが何かしらの組織の中でなされるものだと思い込んでいる人が多いのではないだろうか、と言い換えることができるかもしれない。

私たちの学習は、決して組織の中に限定されてなされるものではないはずなのだが、その点に関して誤った、ないしは非常に限定的な考え方が蔓延しているように思う。仮に私が来年に学術機関に戻ったとしても、それをもって新たな学習が始まるわけでは決してなく、今年のように学術機関に所属していなくても、絶えず自分の学びは日々新たに進行している。

学びとは組織に帰属するものではなく、その人の生活、ないしは人生に帰属するものなのではないだろうか。それがまさに、学びは人生に他ならないという発想であり、絶え間ない学びは絶え間なく続く人生の歩みと同一であるという発想に他ならない。

今日はすでに二冊の書籍を読み終えたが、この流れを受けて、上の階に住むピアニストの友人に借りた『禅と精神分析(1960)』を読み進めていこうと思う。今日は作曲実践も十分に行うことができるだろうし、それに並行して作曲理論や音楽理論の学習も行えるだろう。早朝にふと、問題を発見してそれを解決するというよりも、取り組むべき問題を自ら作り出し、それを解決していくことの中にその人の創造性が発揮されるのではないかということを考えていた。

確かに、私たちの創造性は問題発見や問題解決の際にも発揮されることは間違いないが、卓越した創造性を持っている人は、そもそも問題創出の力が優れているのではないだろうか。普段自分が

---

取り組んでいる作曲実践というのはまさに、音楽的な問題を自ら作り出し、その問題を解く過程の中で進められていく。問題発見や問題解決は確かに重要なのだが、それ以上に、課題を自ら作り出していくことの意義を忘れてはならないのではないかと思う。フローニンゲン:2018/10/27(土)10:53

### No.1363: The Entrance of a Dream

I have a sense of fulfillment, and I will stop today's work here. I can perceive the entrance of a dream to be wrapped in light. Groningen, 20:33, Tuesday, 10/30/2018

#### 3322. 自己超越と主体客体について

今日は本当に雨が降ったり止んだりを繰り返す変動性の激しい一日だ。今は雨が止んでおり、太陽が空に輝いている。ただし、太陽の進行方向の先には雲があるため、再び曇り空になるだろう。

今日は読書と作曲実践の双方が順調に進んでいる。今日はこれまでのところ様々な書籍を読んできたが、そうした読書の合間にも色々なことを考えていた。一つは、人間発達に関して、私たちの主体は、自らを超えていくという側面を持ちながらも、超えた先に待つ新たな主体に即座に結び付けられていくという特徴を持つという点だ。私たちは自らを超えることができるという側面と超えることができないという相矛盾する二つの側面を持っているように思う。

自らを超えられないというのは、超えた瞬間に新たな自己が生起し、再び超越に向けた運動が起こるといった点においてそれを認めることができる。私たちは、自らを超え、再び自らに出会うという絶え間ない繰り返しの運動の中にあり続けているかのようだ。

もう一つ、私は日記のような文章を書くことを通じて、主体を客体化することを絶えず行っているが、主体のある側面を対象化した瞬間に、本質的に主体はその対象を超えているがゆえに、自らが掴みどころのない存在であることに気づく。言い換えれば、主体は究極的には客体化できず、客体化できるのは主体のある側面にすぎないことが見えてくる。これは自己に対してのみならず、他の様々な現象にも当てはまる。例えば、それは科学的な思考においても当てはまる。科学的な思考を用いてある現象を対象化することは、ある現象の一つの側面を複数の側面を理解することには有益であるが、思考による対象化をした瞬間に、それはそのもの自体を捉えたことにはならないということを経験しておく必要がある。



---

思考による客体化を行った瞬間に、掴めるものがある一方で、そのもの自体の認識は滑り落ちてしまうのだ。ここではもちろん、思考による対象化の価値を蔑ろにしているわけではなく、むしろその逆であり、思考によって現象を対象化することによって初めて見えてくるものがあることは確かだ。だが忘れてはならないのは、思考による対象化をどれほど積み重ねようが、ものそれ自体を完全に把握することができないという点だろう。

ここからさらに、何かを学ぶ際に、何かを知ることは、知るものと知られるものとを二分化して初めて成り立つと考えがちだが、そもそも自分にとって重要な知とは、そうした二分法的な発想を超えて、知るものと知られるものが合一したものなのだと思う。

よく私が「自分に引きつけて学ぶ」ということを言っているが、それはそうした意味なのだと改めて気づく。自らにとって重要な知は、単に客観的な知として自己と独立して存在しているわけではなく、自らの存在と分断することができない。仮に何かを学ぶ際に、その対象に対してそれが単に知られるものだと認識してしまった瞬間に、主客の二分が生じ、その結果として獲得された知は真に自分のものにはならないのではないかと思う。そのようなことを窓の外を眺めながら考えていた。太陽はかろうじてまだ雲に包まれていない。フローニンゲン:2018/10/27(土)16:31

#### No.1364: Under the Crystal-Clear Sky of Early Morning

Morning dawned, and a clear blue sky showed up. Because I've not seen it within a couple of days, the beauty of the crystal-clear sky is exquisite. Groningen, 07:42, Wednesday, 10/31/2018

### 3323. パターン認識と作曲実践

時刻は午後の五時半を過ぎた。週末の初日が静かに終わりに向かっていくことを感じる時間帯となった。遠くの空に夕日が輝いている姿を拝むことができる。ここ数日間は天気が優れなかったが、明日からは天気が回復するようだ。

以前にダウンロードしたいくつかの論文をまだ印刷できていないため、来週の天気が良い日にフローニンゲン大学のキャンパスに足を運び、それらの論文を印刷しようと思う。今日はこれから、夕食前に過去の日記の編集を行い、夕食を摂ってからは本日最後の作曲実践を行う。いつものように、一

---

日の最初はバッハに範を求め、一日の最後はハイドンに範を求めて作曲を行う。とにかく作曲においては、自分の手を動かし、実際に曲を作ってみることが一番の学びになる。

作曲実践そのものが今後の作曲のための学びになることに加えて、作曲という創造的な行為に従事することに不可避に付随する変容と治癒の作用についても見逃すことができない。おそらく私が毎日作曲実践を行っているのは、そこに学びに伴う喜びがあり、同時に変容と治癒の喜びがあるからなのだろう。そしてそれは、日記の執筆においても当てはまる。

作曲に関しては、引き続き実践を継続させていくことに加え、今日行っていたように作曲理論や音楽理論の解説書を読むことも行っていく。作曲に際して、今は諸々の事柄を意識的に行っているが、そうした意識的判断が今後はますます無意識化されていくように鍛錬し、意識に上げた判断の複雑性を増加させていくようにする。このプロセスを辿っていく際に、発達科学の知見は大いに役に立ち、今自分がどれほどの複雑性を捉え、それらをいかほどに操作できるのかを把握しながら、より複雑な事象を操作しながら曲を作っていくようにしていく。

扱える一つ一つの事柄が徐々に高度化し、なおかつそれらを無意識的に組み合わせながら操作ができるようになってくると、より洗練された曲が生み出せるようになってくるだろう。究極的には、諸々の複雑な事象を無意識的に扱えるようにし、筆が動くままに曲を生み出していくことができればと思う。

現段階においては、とにかく楽譜上で認識できる音楽記号パターンを増やすことに集中し、認識したパターンを活用できるように鍛錬していくことが重要だ。そして活用できるパターンを徐々に増やしていければと思う。そのためには、理論書の具体例や楽譜を意識的に眺め、パターンを把握していく訓練を積むと有効だろう。このようにして、認識できるパターンを増やしていき、今度はそれを意識的に活用できるようにしていく。

意識的に活用することに習熟すれば、それらを無意識的に活用できるように鍛錬し始め、無数のパターンを組み合わせるようになっていく。筆が動くままに曲を作っていく境地に至るには気の遠くなるほどの時間がかかるだろうが、着実にそこに向けて学習をしていく。そこに向かうプロセス

---

の中で自分に起こることは常に未知であり、そうした未知と毎日遭遇できることに作曲実践の一つの楽しみがあると言えるかもしれない。フローニンゲン:2018/10/27(土)17:50

No.1365: Afternoon with Autumn Winds

I'll go to the center of Groningen for shopping. I'll spend a relaxing time of the rest of today as possible as I can. Groningen, 14:39, Wednesday, 10/31/2018

3324. 教育哲学者の話聞く夢

今朝は五時半に起床し、六時前から一日の活動を開始させた。日曜日の今日もとても充実したものになると確信する。昨日の充実感がうまく今日にバトンを引き渡し、起床した瞬間にそのような確信が生まれてきた。日々を充実感と共に生きること。それが自分の人生を生きることだろう。

今朝はいつもより少し早く起床したが、理想的には毎日この時間帯に起床したい。明日からは、この時間帯に目を覚ましたら、必ずそこで起床しようと思う。

今朝方は少しばかり夢を見ていた。夢の中で私は、ある大学と企業が同居している建物の中にいた。そこでは、学術研究や講義が行われている傍ら、企業活動も営まれている。さらには、その建物には教授陣のオフィスがあり、私はある女性教育哲学者のオフィスの中にいた。その方は日本人であり、どうやらとても有名な学者のようだったが、私は名前を知らなかった。

その教授を紹介してくださったのは、以前勤めていた会社の先輩だった。その教授のオフィスはそれほど大きなものではなく、興味深いことに、そこは仕事部屋というよりも、どこか自宅の一室のような雰囲気を持っていた。というのも、そこにはベッドや食器棚などがあったからだ。食器棚の一つに、何やら高価そうなグラスがいくつもあった。

私とそのグラスを眺めていると、その教授が親切にもそれらのグラスについて説明してくれた。そのグラスの名前を聞くと、私の父が持っているグラスと同じものなのではないかと思った。

私:「研究室にこうしたグラスがあるというのは面白いですね」

---

女性教授:「そうね、ここはもう自分の家の一室と同じぐらいにくつろいだ環境だと思ってるわ」

女性教授は微笑みながらそのように述べた。自宅の部屋と同じぐらいにリラックスして研究に打ち込むのは悪くなく、むしろそれは理想のように思えた。

そのような話を教授としていると、教授を紹介してくださった先輩がやってきた。何やら、その先輩も企業組織の文脈において教育哲学に関心があるらしく、今日は色々とその教授に話を聞きに来たのだそうだ。

私は相変わらず食器棚に置かれているグラスや陶芸品を眺めており、それらを眺めながら二人の話に耳を傾けていた。先輩の質問の中に、早期教育の効果に関するものがあったが、それに対する教授の回答が秀逸で驚いた。私であれば、その質問に対しては科学的な研究の成果によって導き出された「ピアジェ効果」に触れながら回答するところを、その教授は幾人かの哲学者の思想を織り交ぜながら回答をしていった。その教授は出だしに、「無理な早期教育は五つの点において危険ね」と勢いよく切り出した。

一つ目の回答において、数人の哲学者の思想を紐解いてなされる指摘は大変洞察に溢れていた。二つ目の回答にも興味を示していたところ、突然10名ぐらいの人たちが教授の部屋に流れ込んできた。その後ろから、ホテルのボーイのような人がトレイに飲み物と食べ物を載せてやってきた。それが教授の部屋に届けられると、やってきた10名の人たちは教授への挨拶もそこそこに、飲み物と食べ物を持って部屋から去っていった。

教授は「相変わらず困ったわね」と笑顔でぼやきの言葉を漏らした。どうやら、ランチの時間になると、飲み物と食べ物が教授の部屋に運ばれてくるらしく、それは本来、それらを飲み食いしながら会話を楽しむためのものなのだが、多くの人たちは飲み物と食べ物をもらったらすぐにその場を去るようなことが習慣になってしまったらしい。

それは本当に一瞬の出来事だったので、私は飲食物が運ばれてきてからそれがなくなるまでの出来事を唾然として眺めていた。今部屋に入ってきた中に年配の男性教授がいて、彼は地面に置かれていた書籍を倒してしまったのだが、それに気づいていないようだった。おそらく、飲食物をもらうことしか頭になかったのだろう。

---



---

女性教授は、倒された書籍を元に戻して話を続けた。そこからも洞察に溢れる話が続き、しばらくしてから、私は授業の時間が迫っていることに気づき、随分と長居をしてしまったと思いながら、その教授にお礼を述べて部屋を離れた。そのような夢を今朝方見ていた。フローニンゲン:2018/10/28 (日)06:25

### 3325. 教育哲学に関するジャーナルの精査

昨日就寝する前に、今日は芸術教育の哲学に関する書籍を積極的に読んでいこうと思った。とりわけ、ルドルフ・シュタイナーの芸術教育思想に関する5冊ほどの書籍を読み返す計画を立てた。これらの書籍は以前に一度読んでおり、今日もまた自分が関心を持っている主題に絞ってこれらの書籍を読み返していく。昨夜改めて考えていたのは、シュタイナーやクリシュナムルティなど、洞察に溢れる教育思想を持っていた人たちの叡智が学術世界における論説の中に取り上げられないのは問題なのではないかということだった。

どうも私は、シュタイナーやクリシュナムルティのように、優れた思想を持っていながらにして、既存の学術世界から虐げられている人たちに関心を示す傾向があるようだ。私は彼らの思想を学術機関の外で積極的に学んでいくだけでなく、彼らの叡智をなんとか既存の学術世界の論説の中に組み込んでいきたいという強い思いを持っていることに昨夜気付いた。

「虐げられた覚者の魂の復権」という言葉が自分の脳裏をよぎった。確かに数は少ないが、調査してみると、シュタイナーの教育思想に特化した専門ジャーナルがあることを知った。こうした専門ジャーナルだけではなく、教育哲学を扱うもう少し一般的なジャーナルの中で、シュタイナーやクリシュナムルティなどの思想を扱えないかと考えている。

学術研究に関しては、作曲実践と同じように、短い論文を書いていくことに再び意義を見出し始めた自分が昨夜現れた。日々の作曲では短い曲を作ることに喜びを見出しており、それと同様に、10数ページの短い論文を執筆していく。博士論文のように長い論文を一度に書き上げるのではなく、短い論文を絶えず執筆していくこと。そこに意義と喜びを再び見出し始めた自分が生まれたことを歓迎したい。

---

来年再び大学院に戻ることができたら、履修するコースで執筆する一つ一つのレポートを査読付き論文になるぐらいの次元で執筆していく。最初からそうした意図を持って執筆する旨を担当教授に告げ、彼らの支援を受けながら査読付き論文にしていく。今年受理された査読付き論文も決して長いものではなく、それは一昨年に執筆した修士論文を極めて短く要約したものだった。そのように、大学での日々の学びの過程で執筆した文章は、逐一査読付き論文として世の中に共有していくようにしたい。

今朝方、フローニンゲン大学のオンラインジャーナルの閲覧システムを使いながら、いくつかのジャーナルを調べていた。中でも、“Journal of Philosophy of Education”から発行されている論文にはいくつか面白いものがあり、取り急ぎ5本ほど論文をダウンロードした。教育哲学や芸術教育の哲学に関するジャーナルとしてはその他に、“Philosophy of Education: Yearbook of the Philosophy of Education Society,” “Studies in the Philosophy of Education,” “Philosophy of Music Education Review,” “European Journal of Philosophy of Arts Education,” “Philosophy of Music Education Newsletter”などがあり、そこに掲載されている論文を引き続き調査していきたい。

すでに発行が終了してしまっているジャーナルもあるが、過去に参考になる論文が投稿されている可能性もあるため、丹念に過去の出版物を追っていく。過去にどのような議論がなされており、現在においてどのようなことが議論されていないのかを自分なりに把握していくために、少なくとも上記のジャーナルで過去に出版された論文の全てのタイトルに目を通し、自分の関心を引く論文は漏れなく全て読んでいく。作曲実践と同様に、小さな論文を執筆していくことへの意義と喜びを再び見出したことは自分にとってとても大きく、これからの歩みに光が灯ったかのような感覚がする。フローニンゲン:2018/10/28(日)06:54

### 3326. ルーミーの詩集とシュタイナーの書籍の往復

今日は本当に天気がいい日曜日だ。時刻は午前11時を回った。

今朝方は普段よりも幾分早く起床したと思っていたが、よくよく考えてみると、今日からサマータイムが終了し、一時間ほど時刻に変動があったことを思い出した。そのおかげで今日はいつもより早く起床した結果になったのだと思う。

---

目の前の多くの街路樹はもうすっかりと裸になっており、赤レンガの家の前に植えられている街路樹はまだ紅葉した葉をつけている。それが時折風に揺られている姿を眺めている。

先ほどゴミを捨てに外に出た時、あまりの寒さに少々驚いた。外は太陽の光りで照らされていたのだが、それでも肌を刺すような寒さを感じた。今朝起床した時の気温は1度まで下がっており、今日の最高気温も8度ぐらいとのことであるから、先ほど寒さを感じたのも無理はない。後ほど近所のスーパーに買い物に出かける際は暖かい格好をしようと思う。

午前中、ルーミーの詩集を三ヶ月ぶりに随分と読んだ。一つ一つの詩を丹念に読むというよりも、目に止まった詩を立ち止まって読むということを行っていた。改めて、ルーミーの世界認識方法の独特さに関心を示し、いくつかの詩は自分に響くものがあった。ルーミーの詩集と並行してシュタイナーの芸術思想に関する“Art as Spiritual Activity: Rudolf Steiner’s Contribution to the Visual Arts (1998)”の再読を行っていたのだが、ルーミーとシュタイナーからは学ぶことが非常に多いと改めて実感する。

ルーミーからは詩的認識方法に関して学び、シュタイナーからは超越的な世界認識方法について学んでいる。今再読しているシュタイナーの書籍は、霊性と芸術に関する事柄が扱われており、自分の関心と強く合致している。午後からも、ルーミーの詩集とシュタイナーの書籍を交互に読み進めていくことになるだろう。

それらの書籍を旺盛に読み進めたら、今朝方ダウンロードした論文を読み進めてもいいかもしれない。今日それらを読むのか、あるいは明日読むのかはまた後ほど決めたいと思う。いずれにせよ、今朝方に列挙したジャーナルの全ての論文のタイトルに目を通していけば、過去の教育哲学者がどのようなテーマに関心を持っていたのかについて把握することができ、そして現在の教育哲学者がどのようなテーマに関心を持って研究しているのかを掴むことができるだろう。

そうした作業によって、当該領域の土地勘を養っていくことで、自分なりの貢献領域が見えてくるだろう。おそらく自分の貢献方法は、学術世界ではあまり取り上げられない優れた思想家の思想を積極的に採用していくことや、自分の専門領域の一つである発達科学の観点をを用いながら、優れた発達論者の思想を活用していくことになりそうだ。そうした貢献を果たしていくためには、教育哲学

---

に関する土地勘を養い、自分のテーマに沿った既存の知識を新たに組み合わせながら新しい知見を論文の形にしていく必要があるだろう。今はとにかく土地勘を養い、既存の知識を自らの理解を通じて身につけていくことが重要だ。フローニンゲン:2018/10/28(日)11:22

### 3327. 記述を嫌う体験主義者の矛盾した行動

時刻は午後の五時半を迎えた。今日からサマータイムが終了し、日が暮れるのも随分早くなった。この時間帯はちょうど夕日が西の空に沈む間際だ。

夕方に作曲をしている最中、輝く夕日を眺めながら、静かな波のような感情エネルギーを感じていた。外面世界と内面世界が相互作用し合い、そうした内的感覚を引き起こしていたということ、そしてそれが曲としての形に変貌を遂げていくことは大変興味深い。

私たちの内側には、絶えず混沌とした内的感覚を生成する力と、それを秩序立てる力の双方が存在しており、二つの力が一つになってある形を生み出していくのだろう。内側の造形作用というのは、秩序化を促す働きであり、それは混沌とした内側の感覚に形を与える役割を担う。そのようなことを夕方の作曲実践の最中に考えていた。

昨日の日記の中で、いくらある対象を記述してもそのもの自体を記述することはできないと書き留めたいように思う。その主題について改めて考えていた。ここではもちろん、記述することの価値を蔑ろにしているわけではない。むしろ逆であり、記述して初めて開示される真実というものがあり、記述する試みを通じて科学や私たちの文明が発達してきたことを忘れてはならない。

自分が日々自己の存在や人生などを記述しているのは、それら自体をあるがままに記述できないのは百も承知だが、それでも記述して初めて開示される自己の存在や人生の真実があるからなのだと思う。そうしたことに気づいた瞬間に、記述する行為を蔑ろにすることはできず、そこに記述の価値を見出すことができる。

記述という行為は、精神世界の人たちや非二元の体験を手放しで称賛する人たちから批判を受けることが頻繁にある。彼らは非二元の体験にせよ、別種の高次元の体験にせよ、それらを記述することを極度に嫌い、それらの体験は記述を超えたものだと述べる。そうした体験が記述を超えるとい

---

う点に関しては、上述のように私も同意している。だが、彼らは多分に主観主義的であり、とりわけ自然言語や科学言語による記述を過度に拒む傾向にあり、それは問題があるように思える。

そもそも、彼らが自らの体験を非二元だと知りえたのはなぜだろうか。そうした体験が非二元だと納得できたのはなぜだろうか？それは誰かの記述があったからではないだろうか。また、彼らは記述を嫌っていながらも、そうした記述を読むことを好んでいるという矛盾した特徴を持っている。事実そうした体験に関する書籍を旺盛に読んでいるのがを記述を嫌う彼らの姿だろう。

非二元の体験が記述できないと知っていながら彼らがそうした書籍を読むのはなぜなのだろうか？ここに彼らの矛盾した行動を見出すことができる。非二元の体験特性、それに至る階段を含め、記述して初めて私たちに共有される知があることを忘れてはならない。

今日はシュタイナーの書籍を随分と読み進めており、シュタイナーが述べている精神科学というのは、記述の限界を認識していながらも、そうした限界に挑戦するかのように記述を試みる思想・方法体系なのではないかということに気づいた。シュタイナーは、高次元の体験そのものを記述することの限界を当然ながら認識していたが、それでもそうした現象を記述していたことの意味、そして残された記述の意味そのものを考えてみる必要があるのではないかと思う。フローニンゲン:2018/10/28 (日)17:53

### 3328. 不老不死の薬を浴びる夢

日曜日が終わり、新たな週を迎えた。今日は五時過ぎに起床し、五時半を少し過ぎたところで一日の活動を開始した。

サマータイムが終了したせいもあってか、起床時間が少し早くなり、これは早寝早起きを心がけている自分にとっては望ましい。五時台に起床することができると、その日一日の活動に従事する時間が随分と増えたような感覚があり、強い充実感を持って一日を過ごすことができる。

今朝は起床した時に、脳が完全な休息を取り、一日の活動に向けての準備が万全であるかのように感じた。今日も旺盛な探究活動と創造活動に従事していこうと思う。



---

今朝方は印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、海外に出張に出かけるために空港に向かおうとしていた。実はその数日前にも海外に出張をしており、出張から帰ってきた後に、家で父と少しばかり話をしていた。話のテーマは航空運賃の請求についてであった。というのも、今回出張したのは、父の会社の海外子会社にコンサルティングを提供するためであり、交通費の申請の決まりについて確認する必要があったからである。

本来であれば、出張前にそれを確認する必要があったのかもしれないが、私は事後的にその確認をした。今回は移動時間が比較的長かったため、ビジネスクラスを利用した。父に確認したのは、ビジネスクラスに搭乗した全ての金額が請求できるのか、それともエコノミークラス分までしか請求ができず、その差額はこちらで負担する必要があるのかどうかだった。

そのようなやり取りを父としている最中に、私は次の出張に持って行くワイシャツの準備をしていた。そのような場面があり、そこから私は次の出張に向けて空港に向かっていた。

どうやら今回の出張は、一度中国の空港に行き、そこを経由してオーストラリアかどこかに行くことになっていた。中国に行くまでのフライトの時間が迫っており、私は少しばかり急いで空港に向かった。空港に到着すると、どうやらそこで目的のフライトに搭乗できるわけではなく、そこではボーディングパスしかもらえず、別の空港へは歩きかバスで移動する必要があるようだった。

歩くと随分と時間がかかり、バスで行こうにも待ち時間があるであろうから、目的の空港に行くための最適の手段が何かを少しばかり考える必要があった。すると次の瞬間には、私はあるホテルの一室にいた。そこは開放的な窓があり、大きく立派な机が備え付けてあった。見るとその机には、書類が何かにサインをしている一人の日本人男性がいた。

その男性とは面識はないのだが、日本で有名な実業家であった。その方がサインをしているのは、何かの請求書であり、どうやらそれは航空券に関するものようだった。その方が書類にサインを終えると、笑顔で私に話しかけてきた。なにやらその方は、不老不死の薬を手に入れたらしく、それが浴室にあるとのことだった。その方が浴室にある不老不死の薬を見ていってはどうかと提案してくれたので、私は浴室に行ってみた。するとそこには、一人の中年の中国人男性がいて、その男性はお湯が張られていない浴槽の中にかがみこんでいた。

---

どうやらシャワーから不老不死の薬が流れ出てくるようであった。私は不老不死を求めるといよりも、むしろその逆で、一生を閉じることなく永遠に生き続けることに対して恐怖感のようなものを覚えていた。それは死ぬ恐怖ではなく、生き続ける恐怖だった。その恐怖心を持った瞬間に、浴槽にかがみこんでいた中国人男性と私の体は入れ替わり、私が浴槽の中にいた。

するとシャワーから、不老不死の薬が一滴ずつしたたり出し、私はそれを浴びた。一滴でも自分の身体にそれが付着すると、人間は不老不死になるそうだった。私は不死であることの恐怖と、不死であることへの関心の間に揺れており、一滴ずつ薬が垂れてきた時にはある種の放心状態にあった。垂れてくる薬を否定することも、進んで受け入れることもせず、したたり落ちる薬を無心の状態で浴びている自分がある場にいた。フローニンゲン:2018/10/29(月)06:13

### 3329. 瞬間性を尊重した作曲実践

今朝方の夢の中で不老不死の薬を浴びる事態に遭遇したためか、起床した時に自分の内側に流れるエネルギーがいつも以上に若々しく、それでいて力強いことに気づいた。自分のライフワークに邁進するにふさわしい活動エネルギーが自分の全身に満ち満ちていることに気づく。

今日も読みたいと思う文献を旺盛に読み、何か形を生み出したいと思う時に日記を執筆したり作曲をしたりしようと思う。そこには強制感が挟まれる余地はなく、その瞬間に自分の内側が望む活動に従事している自分がいるだけである。

本日も、読みたい文献を読みたいだけ読み、作りたいものを作りたいだけ作っていくようにする。それらを行うタイミングに関しても、全て自分の内側が望む時間帯にしようと思う。それに逆らうことなく、純粋な探究欲求と創造欲求に自己を任せようと思う。一切の強制はなく、そこには自発性があるだけである。こうした自発性こそが創造性の源なのかもしれない。

今日はこれから過去に作った曲を編集する。その過程の中で、曲を聴きながら内的感覚をデッサンしていく。デッサンの実践を続けていると、それは夢を言語化するのと同様の治癒的・変容的効果があるような気がしている。形を生み出していくことの力を改めて思う。

---

過去の曲を編集し終えたら、バッハの四声のコラールに範を求めて一曲作る。371曲ほどあるコラールのうち、ようやく50曲目に到達した。すでに69個の二声のコラール全てを一度参考にしてきたこともあり、確かに四声のコラールに関してはまだ多くの曲が残っているが、それでもこれまで随分とバッハのコラールを参考にしてきたことがわかる。早朝の作曲実践では、バッハが創出したメロディーラインを辿ることを行い、メロディーを創出する感覚を養っていく。

バッハのコラールに範を求める早朝の作曲実践は、詰将棋を一つ解くような実践となった。確かにそれは地味な実践かもしれないが、そこには曲を生み出す大きな喜びが存在しており、作曲に伴う、問題を作り出す楽しみ、問題を解決する楽しみなども感じることができる。

今朝方ふと考えていたのは、今後も短い曲を作り続けていく中で、一曲を作曲する最大の時間は一時間をめどにしようということだった。バッハやベートーヴェンのように曲を構築していくという感覚を用いながらも、数日間かけて一曲作るというようなことはしない。

理想は無駄な作為性をどんどん排除していき、いかなる曲も一時間以内に作り上げていくという境地に辿り着きたいと思う。私にとって作曲は、日記を執筆することと同じ感覚と意義を持つ営みであるから、日記の一つの記事に一時間をかけることがないように、一つの曲についても最大で一時間の時間軸の中で曲を作っていく。

自分の人生の中のある瞬間に生起する感覚を、それが望む形として音楽的に表現することが自分にとっての作曲の意味であるから、瞬間性を損ねるような長い時間をかけて曲を作らないようにしていく。そのようなことを先ほど考えていた。フローニンゲン:2018/10/29(月)06:29

### 3330. 記述を超えた日々の生活

今日はもう少し晴れ間が顔を覗かせると思っていたが、一向に太陽の姿が見えない。鬱蒼とした雲が空を覆っており、寒空の中を自転車で駆け抜けていく人たちの姿を見かける。

気がつけば、欧州で三回ほど誕生日を迎え、今もなおこの地での生活は日々静かに進んでいる。欧州で過ごす毎日の生活について絶えず日記を書き留めているが、ここでの実際の生活は絶えず日記を超えたものであるということに気づく。悟りの体験を言葉で記述した瞬間に、それはもはや悟

---

りの体験ではなくなってしまうように、欧州で過ごす日々の体験は日記で記述される事柄を常に超えている。そのような日々がこれからも続いていく。

今朝方の夢の中で、不老不死の薬を飲む事態に遭遇していたことを再び思い出している。死への恐怖と不死の恐怖の先には何が私たちを待っているのだろうか。

死ぬことと死なないことの二元論を超えた先にある認識世界に自ずと思いを馳せる。今日の天気はそうしたことを私に促してくるかのようだ。

早朝よりシュタイナーの芸術論に関する二冊の書籍の再読を終え、これから読み進めていくのは美学に関する“The Foundations of Aesthetics (1966)”という書籍だ。本書は、フローニンゲンの街の古書店Isisで購入したものであり、購入から随分と時間が経ったが、本書の初読をこれから楽しみたいと思う。特に、音楽に関する記述がある部分を中心に読み進めていこうと思う。

午前中にはシュタイナーの書籍以外にも、上の階のピアニストの友人から借りた『禅と精神分析 (1960)』を読み進めていた。本書を借りる際に、彼女がこのような書籍を持っていることに驚いたが、本書を読み進めてみると、内容の充実振りにはさらに驚かされた。これはもう購入して手元に持っておくべき書籍だと思い、日本のアマゾンから本書を購入し、それを実家に送る手続きをした。本書はフロムの書籍を翻訳したものであり、原著を読んだわけではないのだが、おそらく翻訳の方が原著よりもわかりやすく、優れた訳書だと直感的に確信した。

本書の購入に合わせて、鈴木大拙の『禅 (1987)』も合わせて購入した。二冊の和書は実家に送るため、今度日本に一時帰国した際にそれらを読むことをとても楽しみにしている。語ることのできないものが語られた時に喚起される特殊な感覚というものが存在するようであり、二つの書籍はそうした感覚を私にもたらしてくれるものだと強く思う。

昼食まで上記の美学に関する書籍を読み進め、昼食後に仮眠を取ってから作曲実践を行う。その際にはテレマンに範を求める。早朝の日記で書き留めていたように、日々の作曲実践では曲を構築していくという側面を大切にしながらも、同時にその瞬間に生起する自分の内側の感覚を逃さずに捕まえ、それを形にしていくという点も大切にしていく。つまり、構築性と瞬間性の絶妙な塩梅を

---

通じて作曲実践に励むように心がけていく。それは言い換えれば、意識的・無意識的な音楽の創出実践だと言えるかもしれない。フローニンゲン:2018/10/29(月)11:13

### 3331. 転調による無意識の内容物の客体化と治癒・変容

結局今日は一日中太陽の光を見ることなく一日が過ぎていった。時刻は午後の五時を回り、空が暗くなり始めている。

白いカモメの大群が空を旋回している姿が見える。寒空がダンスをしているかのような姿を窓から眺めながら、今日は随分と読書を行っていたように思う。

“The Foundations of Aesthetics (1966)”の初読を終え、本書のいくつかの章は認識論の観点と絡めて深掘りしていくに価するものだと思った。以前に少しばかり考えていた諸々の主題について考えを深めるために参考になる記述がいくつかあり、そうした記述が書かれている章に付箋をつけておいた。

今、フリードリヒ・グルダの演奏するバッハのピアノ曲を聴いているが、それらの一連の曲を過去に聴いた人が一体どれほどいるのかについて思いを馳せていた。きっと無数の人がそれらの曲を聴いてきたに違いない。

バートランド・ラッセルが指摘しているように、芸術作品は本来非消費財としての特徴を持ち、芸術作品を鑑賞する人が増えたとしても価値が減じるようなものではない。バッハの曲を聴いてきた人たちは過去無数に存在していたに違いないが、それによってバッハの曲が消費され、価値が減じていくようなことは一切なく、むしろその価値が高まっているかのように思えるのは不思議なことである。

今日はこれから、エルヴィン・シュレディンガーの書籍“*What is Life? & Mind and Matter* (1969)”の初読を開始しようと思う。一生涯にわたってヴェーダ哲学に関心を示したこの類いまれな理論物理学者の書籍を読み進めていくことは非常に楽しみだ。本書を今日一日で読み終えることはできないであろうから、途中まで読む進め、夕食後には本日三回目の作曲実践を行いたい。午後上述の美学に関する書籍を読んでいた際に、転調の技術を活用することにより、自らの無意識上



---

の内容物を転調後の音楽空間内で客体化させることができるのではないか、というアイデアが浮かんだ。

ある調を選択して曲を作っていく最中には、必然的にその調に影響を受けた無意識の内容物が浮かび上がってくる。その調のまま曲を作っていく過程の中でもその内容物を客体化することは不可能ではないが、転調を挟むことにより、音楽空間を変容させ、新たに生まれた音楽空間内で先ほどまでの無意識の内容物を捉えることができるのではないかという考えが芽生えた。それは単に無意識の内容物を客体化することに留まるのではなく、客体化によってその内容物を生み出した無意識の領域の治癒と変容を促進することも可能なのではないかと思う。そのようなアイデアの元、午後に転調の技術を試しながらテレマンの曲に範を求めて作曲実践を行った。

テレマンの曲を参考にしていると、改めてテレマン及びバッハの音楽に自分を惹きつける何かがあることがわかった。これは以前から述べていたことだが、今日もそれを直接体験を通じて実感した。それが何なのかは作曲実践を通じて、そして自らの内省を通じて徐々に明らかにしていきたいと思う。おそらくそれは自己の本質に関係することなのだと思う。フローニンゲン:2018/10/29(月)17:17

#### No.1366: A March On a Starry Night

I was remembering the astonishingly beautiful sky at dusk. Today was very blissful. So will tomorrow. Groningen, 20:09, Wednesday, 10/31/2018

### 3332. 他者理解と一なる心の可能性

時刻は午後の七時半を過ぎた。つい先ほど夕食を食べ終え、これから就寝までの最後の活動に従事していく。具体的にはハイドンに範を求めて一曲作り、時間が余れば音楽理論に関する書籍を眺めていく。今日は本当に旺盛な読書を行うことができ、いつも以上に充実感がある。

今日も再び、知性を働かせた思考、すなわち概念的な思惟が必要な理由について考えていた。端的にそれが必要なのは、概念的な思考の限界を知るためなのだろう。確かに私は日々——そして今この瞬間も——言語を通じて思考を働かせ、その思考内容を文章として書き残しているが、それを行っ

---

ている理由としては、もうこれ以上言語化することのできない所まで辿り着き、その背後にあるものを感じるためなのだと思う。

言語を超えた直接体験。あるいは言語を極限まで用いた結果として獲得される超越的な直感を活用するために、日々文章を書き留めているのかもしれない。また、意識の上で言語を用いた思考を絶えず行っていることその他の理由としては、言語が生成する無意識の領域そのものを解体していくためなのではないか、ということにも気づいた。これは大変興味深く、これまで想像したことのないものだった。

今から七年前にジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃、「ダイヤモンドアプローチ」という自己探求技法の実践をするクラスがあり、そこで「自分は誰か？」という問いを対話の中で何度も繰り返し向き合っていくワークがあった。そこでは言語化できる極地までその問いを深めていくのだが、最後の最後で面白い出来事に遭遇した。それは、自らの言語機能が停止し、沈黙するしかないということであった。

その時の出来事を改めて思い出すと、そこでは言語を生み出す無意識の領域が解体され、それによって沈黙が生まれ、その沈黙の中に芽生える直感的な感覚こそが自分が何者であるかを規定するものだったのではないかと思う。言葉と意識、さらには無意識との関係性については今後も考えを深めていく。

書斎の窓の外を眺めると、辺りはもうすっかりと闇に包まれていることに気づく。今日は夕暮れから闇に変わる推移を見逃していたようだ。一なる闇が外の世界に広がっている。

夕食前に、シュレインガーの“*What is Life? & Mind and Matter* (1969)”を読み進めている時に、ある人が他の人と共通理解を得られるということの中に、一なる心の存在可能性を見て取ってひどく興奮していたのを覚えている。

よくよく考えると、ある人が全くの他人の考えなり感覚なりの一部を理解することができるというのは驚くべきことであり、それが可能なのは、私たちの心は多様でありながらも、同時に究極的には一つだからなのではないかと思った。おそらくそれが「ビッグマインド (Big Mind)」と呼ばれるものなのだろう。また、シュレインガーが指摘しているように、英語において意識は“consciousness”と表記さ

---

れ、それは複数形を取ることはなく、常に単数系だ。興味深いのは、心 (mind) は複数形を取ることがあり、それはもしかすると心の多様性を暗示しているのかもしれない。

だがそうした多様性を持つ心ですらも、ビッグマインドという一つの心に至れる可能性が常に私たちの内側に存在しているのだろう。おそらく、ビッグマインドに到達するという考え方はそもそもおかしく、本質的には常に一なる心を私たちが持っているからこそ他者理解が可能なのではないかと思う。意識が複数形を取らず、常に単数系であるというのは、アトマンとブラフマンが一致するという梵我一如を暗示している可能性があることもここに明記しておく。フローニンゲン:2018/10/29(月)  
19:58

#### No.1367: The Brilliant Child's Mind

Ending a day represents returning to childhood and starting tomorrow with a new mind.

Groningen, 20:40, Wednesday, 10/31/2018

#### 3333. 今日から今から

今朝、五時半過ぎに目を覚ましてみると、寝室の窓を打つ雨音が聞こえてきた。六時を回った今においても窓に雨滴がぶつかる音が聞こえる。どうやら今日は一日中雨のようだ。だが、気温に関してはそれほど寒くなく、最高気温は11度まで上がるらしい。今日の食料はすでにあるため、買い物に出かける必要はなく、今日も一日中探究活動と創造活動に打ち込もうと思う。昨日のように、いくつかの書籍を読み進めていき、作曲実践も旺盛に行っていく。

今朝方の夢について少しばかり思い出している。深夜二時に一度目を覚ました時に見ていた夢は、高校の英語教師に対して反論しているような内容だったように思う。反論の具体的な内容は忘れたが、その教師が述べていることがとても理不尽だったため、その理不尽さを様々な学問領域の知識を用いて指摘し、能力の低い教師が能力の低い学生を生むことについて自分の意見を述べていたように思う。

私はその教師は物分りの良い人間だと思っていた分、今回の理不尽な発言にはがっかりし、その反動もあってその教師の述べたことを激しく批判したのだと思う。ただし、批判をしている時の自

---

分は至って冷静であり、冷静さの中で少しばかり声を大きくして発言をした。クラスにいた他の生徒たちも黙って私の発言を聞いており、その教師も黙って私の意見に耳を傾けていた。その批判が的を得ていたのか、教師は納得したかのような表情を見せた。そこで一度目を覚ました。

五時半過ぎに起床する直前まで見ていた夢の中で、私は実際に通っていた中学校の教室にいた。どうやら今は掃除の時間のようにあり、生徒全員が掃除に勤しんでいる。私は教室の掃除をする前に、一階に降りて水を飲みに行こうと思った。だが、一人の恰幅の良い教師が階段を上ってくる姿が見えたため、一階の冷水機で水を飲むのではなく、二階の水道で水を少しばかり飲むことにした。

水を飲んですぐに教室に向かうと、全ての机が教室の後ろに置かれていて、これからフロアの掃除が始まるようだった。私は教室の後ろにある、掃除道具が入ったロッカーからほうきを取り出し、それを用いて床を掃いていこうと思った。

すると突然、女性友達の一人が教室の前のドアから中に入ってきて、教室内にいる全員に聞こえるほどの声で、「私、今から何でも学べそうな感じがする」と述べた。教室にいた他の生徒たちは、「何を言ってるんだ？」というような呆れ顔をしていた。彼らの表情を確認するよりも先に、その女性友達は誰に向かって述べたのかわからないが、「今からドイツ語を学んでも遅くないよね？」と元気な声で述べていた。教室にいた他の生徒たちは一様に、「そんなことは無理だ」という表情を浮かべていた。

皆、それを口にするにはなかったが、一様に、今から何かを新しく学ぶことに対して否定的であり、ましてドイツ語のような外国語をこれから学ぶことなど無理だという雰囲気を出していた。しかし、私だけは全く違った考えを持っていた。そこで私は、「新しいことなんていつからでも学べるよ。ドイツ語？今日から学んだらいいんじゃない」と彼女に述べた。すると彼女は生き活きとした表情を浮かべ、「じゃあ、今日からドイツ語教えて」と私に述べてきた。

私はドイツ語に精通していないため、自分が教えることは難しいが、ドイツ語を学ぶ手段ならいくつもあると教えた。それを聞いた彼女は、嬉しそうにして教室の後ろの扉から外に出て行った。

---

そのような夢を今朝方見ている。教室にいた他の生徒たちの、新しいことを学ぶことに対する否定的な態度が印象に残っている。同時に、彼らはまるで人生を諦めたかのようなオーラを発していたことも印象に残っている。多くの人は過去の中に生きている。

正直なところ、何か新しいことを学ぶことに関して、遅すぎるということは何もなく、また、これまでの自分が何をしてきたか、何を学んできたかなども一切関係ない。確かに、過去に学んだことと関連付けて新しいことを学ぶことができれば、新たな学びが容易になることはあるが、基本的には過去に自分が何を学んでいたかなどほぼ関係ない。

人は常に新たなことを今この瞬間から学べる。多くの人はあまりにも過去の中に生き過ぎている。あるいは、現状の自分の中に生き過ぎている。

私たちは常に新たな存在に向かって超越していくことを発達の本質に持ち、新たな自己は今の自分には全く想像することもできないような存在であるのだから、幾つになっても新たなことを学ぶのはおかしいことではなく、むしろそれが自然なことなのだと思う。フローニンゲン:2018/10/30(火)  
06:47

#### No.1368: Morning Sunshine

The weather is very fine this morning, so I'll go running before lunch. It is hard to believe that it will rain in the afternoon. Groningen, 08:32, Thursday, 11/1/2018

### 3334. 理解を生む原動力

気がつけば、今月もあと少しで終わりとなり、新たな月がやってくる。11月に入ると、フローニンゲンはぐっと冷え込むことが予想される。フローニンゲンで生活を始めてから迎える三回目の11月なのだから、これからどのような気候になるのかは把握しているつもりだ。時刻は午前七時に近づきつつあり、今もまだ小雨が降っているような状況だ。

今日はこれから、早朝の作曲実践をした後に、シュタイナーの音楽理論に関する書籍と、シュタイナーの色彩理論に関する書籍を読み進めていく。それらの書籍の再読を終えたら、ルーミーの詩



---

集を眺め、関心を引く詩に焦点を当ててそれを読んでいく。午後からは、美学に関する“*Inquiries into the Fundamentals of Aesthetics (1974)*”という書籍の初読を行う。昨日読み進めていた美学に関する書籍と同様に、本書も随分と中身が濃い様子なので、自分の関心を引く箇所にと絞って読み進めていく。要は、読みたいと強く思う箇所だけ読むということだ。この方法は実はとても理にかなっているのではないかと最近思う。

人は読みたくないものを読むことはできない。これは当たり前のことだと思われるかもしれないが、多くの人は無意識的に書籍の最初から最後までを一字一句辿っていきこうとする。

その書籍の内容が全て自分の関心に合致し、読みたいテーマであれば問題ないのだが、一般的にそのような書籍と出会えるのは稀である。それにもかかわらず、多くの人は自分にとって重要なテーマが何かを忘れ、自分の関心の焦点が定まらない中で、書籍を最初から最後まで読もうとする。そうした意思は尊重するが、結局最後まで読み通すことができず、最初の数ページ、あるいは最初の数章で書籍から離れてしまうことが多いのではないかと思う。

私は古書を購入することを好んでおり、それは他の人がどのように書籍を読んでいるのかがわかる時があるからだ。書籍の書き込みなどを見ていると、他者がどのような考えを持ってその書籍を読んでいたのかがわかる時があり、自分とは異なる視点を持って読んでいることに気づくことがあり、それは自分の視点を広げる役割りを果たしている。

一方で以前から気になっていたのは、書き込みをするような能動的な意思を持つ人たちですら、どうも書籍の最後まで読み通すことができていないようなのだ。上記で述べたように、最初から最後まで一言一句読んでいくことは賢明ではないのだが、どのような内容が本書の中に書かれており、本書の全体観を掴むために最初から最後まで目を通すことは大事である。察するに、多くの人は書籍の前半で挫折をし、どうも後半の内容に一切目を通さないまま書物を閉じてしまっているのではないだろうか。これはその書物の価値を減じてしまっているような事態だと思う。

今その瞬間に全てを理解する必要は全くなく、その書籍に何が書かれているのかの全体像を把握し、自分の関心に合致する箇所だけを読んでいくことが、結果的には一番実りのある読書のように思える。読みたいと思わせてくれない箇所をいくら読もうとしても、結局その内容が頭に入ってくるこ

---

とはあまりなく、理解が進まない。理解を生む原動力は、兎にも角にも「理解したい」という気持ちなのだから、そうした気持ちがないまま書籍を漠然と読んでいては、結局何も身につかないだろう。そうした考えに基づき、自分が理解を深めたいテーマに絞り、今日も複数の書籍を横断しながらその理解を深めていく。フローニンゲン:2018/10/30(火)07:04

#### No.1369: The Autumn Geometrical World

Since I went running before lunch today, my body and mind became quite refreshed. I suppose that it becomes easier for me to perceive unique geometrical patterns in autumn. Groningen, 15:50, Thursday, 11/1/2018

#### 3335. 若さと発達について

午前七時を迎え、少しずつ辺りが明るくなってきた。今日も一日中、鬱蒼とした空を見ながら自分の取り組みに従事していくことになるだろうが、今の自分の心は晴れ渡っている。常に爽快さと落ち着きを持った心がここにある。

今朝方見ていた夢について再び思い出している。多くの人はずいぶん過去の自分に縛られたまま生きようとするのだろうか。新たなことを学び、新たな自分に変容していく一歩を踏み出すのに躊躇するのはなぜなのか。そのようなことを改めて考えていた。

夢の中で現れた、私の友人の発言と心意気はとても正しいように思う。彼女は、「私、今から何でも学べそうな感じがする」と述べ、その時の彼女の生き活きとした表情と発せられている潑刺としたエネルギーを忘れることはできない。一方で、そうした彼女の発想に対して疑問を呈するような態度を取っていた他の生徒たちの暗く重たい雰囲気についても忘れることはできない。生きることに、学ぶことに、多く人は本当に限定的なものを見方、あるいは何かに縛られたような見方しかできないのだと改めて思う。

夢の中で現れた女性友達は、教室に入ってきた時は中学生時代の面影を持っていたが、教室を後にする時は40代も半ばを迎えたような姿になっていた。それでも彼女は、生き活きとした表情を浮かべ、まるで子供のように、新たな挑戦に向かっていくエネルギーを発していた。それは黄色に

---

輝くエネルギーであった。もしかすると、彼女は現実世界で40代の後半を迎えた時に、本当にドイツ語を学び始めるのかもしれない。しかもドイツに移住する形で。

数日前に、ある協働プロジェクトに関するオンラインミーティングをしている最中に、年齢と人間発達の話題となった。そこで私はいつも自分が考えていることを素直に述べた。それは端的には、人は皆、65歳までは少年少女であり、65歳から80歳ないしは85歳ぐらいまでが青年期だというものだ。80歳か85歳を迎えてようやく人は大人になり、そこから大人としての成熟した人生を歩んでいく。

それぐらいに人は未熟であり、同時に人はそれほどまでに若くいられる。厳密には、80歳や85歳で大人になったとしても青年期のような若いエネルギーを持って日々の活動に取り組むことは可能であり、むしろそれが自然なのだと思う。

私が長らく師事していたオットー・ラスキー博士は今年で82歳を迎えた。80歳を超えても——いやむしろ、80歳を超えたからこそ——、ラスキー博士は日々様々な活動に精力的に取り組んでいる。先日ハーバード大学教育大学院を訪れた時にお会いした、キャサリン・エルギン教授は今年で71歳になるが、青年期のような澁刺としたエネルギーを持ちながら知的活動に従事していることを感じた。そのエネルギーの強さには圧倒されてしまうほどであった。

過去の自分に縛られながら生きることや、若く澁刺としたエネルギーを失って生きるとはやめにしたほうがいいのか。私たち人間は、確かに一生涯をかけて発達を遂げていくが、変わらないものがある。それは、私たちは絶えず新たな存在に向かっていくということだ。新たな自己に向かうためには澁刺としたエネルギーが必要であり、過去の囚われから解放されていく必要があるということをおぼえてはならない。フローニンゲン:2018/10/30(火)07:30

### 3336. 本日の読書より

時刻は午後の五時を迎えた。今日は終日曇り空であったが、夕方には遠くの空に太陽の光を少しばかり見つけることができた。今は再び雨雲のような灰色の雲が空全体を覆っている。幸いにも明日は晴れのようなから、街の中心部に買い物に出かけ、その帰りに大学に立ち寄って論文を印刷しようと思う。

---

昨日に引き続き、今日も旺盛な読書を行っていた。読んで書き、書いては読みという毎日を繰り返していると、自然と自分の脳が以前とは異なった働きをし始めているように感じる。発達理論の観点から言えば、知性の位相が変異し始めているのかもしれない。

本日の読書のメインはシュタイナーの思想であり、音楽理論に関する書籍と色彩理論に関する書籍の二冊の再読を終えた。絶えず私たちの内側には音のリズムが流れており、それは物理的・精神的な次元の双方に見て取ることができる。また、思考と光は同一のものであるというシュタイナーの発想についてこれから考えていきたいと思う。私たちの思考は光であり、同時に音でもあるのだろう。音と光に対する関心が高まる。

色彩理論に関する書籍も得ることが多く、当然ながら疑問を挟むような理論的説明もいくつかあったが、それらを一旦保留にして、色彩を意識した作曲実践を行う際に有益な発想を中心に学んでいった。本書に関しては、また近々再読を行うだろう。

今日の理論的な読書はここで終わりにし、明日は社会学に関する書籍を読んでいこうと思う。具体的には、半年ほど前に購入した“The Sociology of Georg Simmel (1950)”を読み進めていく。本書を読む目的は明確であり、それは何かというと、芸術教育の価値を社会的な観点から探究していくことである。著者のジンメルは、直接的には芸術教育の価値について述べてはいないであろうから、あくまでもジンメルの社会的な発想の枠組みを理解し、それを自分が芸術教育の価値の変遷を考えていく際の参考にしていく。

夕食後に時間があれば、ルーミーの詩集の続きを読んだり、作曲理論に関する書籍を読んだりするなど、理論的な書籍とは異なる思考と感覚を活用する書物を読んでいくことにする。夕食後には本日三度目の作曲実践を行う。その時にはハイドンを参考にする。

今朝改めて、バッハ、テレマン、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンを参考にすることを優先しようと思った。彼ら以降の作曲家にも時折半を求めることはあるが、基本的には上記の作曲家を参考にし、その後には彼ら以降の作曲家を参考にしていく。これはつまり、音楽史を辿りながら作曲実践をしていくことを意味するということが今朝方気づいた。音楽史の流れに沿って作曲実践をし、過去の

---

偉大な作曲家の叡智を歴史の変遷に合わせて汲み取っていく。フローニンゲン:2018/10/30(火)  
17:30

### 3337. 形を生み出す実践活動

たった今夕食を摂り終え、これから就寝までの取り組みに従事する。具体的には、ハイドンの変奏曲に範を求めて作曲を行う。一日の最初と最後に作曲実践を行うことは、自分にとって最良のリズムを生み出しているかのようだ。一日の最初に作曲をすることによって、その日一日のリズムを生み出すことができ、一日の最後に作曲をすることによって、明日に繋がっていくリズムを生み出すことができているように思う。こうしたことを日々行っているために、毎日が連続した一つの大きな流れのように感じられるのだろうし、時間が常にそこに佇んでいる大海のように感じられるのだろう。

夕食を摂りながら、日々の活動を通じて考えたことや感じたこと、読書などを通じて得られた知見を日記として形にしておくことは、具体的な実践活動に他ならないのだと思った。確かに、得られた知見を通じて協働プロジェクトに従事することや書籍を執筆することはより直接的な実践活動なのかもしれないが、私にとっては日記の執筆も極めて重要な実践活動である。

作曲実践も含め、それらは形を残していくという点において極めて具体的な実践活動なのだと思う。書かれた日記や作られた曲は形としてこの世に残り続けていく。こうした具体的な実践活動の意義について先ほど改めて考えていた。

昨日の読書の過程の中で、フロイトの成し遂げた仕事について改めて感銘を受けていたことを思い出す。現代の発達研究において、とりわけ人間の動的な発達過程を明らかにするためにダイナミックシステム理論を活用する学派は、多くの時系列データを長期間集め、そうしたデータをもとに発達プロセスを理解していく必要性を説いている。

この二年間に私が行った研究も、そうした時系列データを集め、それを非線形ダイナミクスの手法を通じて分析していくことだった。しかし、能率と効率性を求めることに傾きがちな現代の科学コミュニティの中で、長期間にわたって人間発達に関する時系列データを収集していくことは難しい。それとは対照的に、フロイトは数年を超える長大な時間をかけて一人一人のクライアントと向き合い、細かな観察を行い続けた。確かにフロイトは定量的な分析などは用いていないが、膨大な時系列



---

データを細かな観察を通じて定性的に分析をし続けた結果として、精神分析という大きなシステムを構築した。

フロイトの理論には限界や盲点があることは確かだが、それでもフロイトが行ったことは現代では行い難いものであり、長大な時間をかけて構築した一つの理論体系には貴重な価値があることは確かだと思う。科学研究において、フロイトと同じように長大な時間をかけてデータを集め、それを精緻に分析していくことに今の私は関心を持っていないが、おそらくそれと似たことを創造活動において実現していきたいと思う。

長く継続して続けていくこと。その過程において、絶えず形を残していくこと。その大切さを改めて実感する。フローニンゲン:2018/10/30(火) 19:55

### 3338. 今朝方の夢

今朝は五時半に起床し、六時から一日の活動を始めた。ここ最近では、起床した時の心身の調子が特に優れている。就寝前にパソコンを見ることを控え、なおかつ就寝前に体をほぐすことやエネルギーワークを行っていることが良い影響を与えているのかもしれない。

今日は晴れの予報だったのだが、起床してからすぐに窓ガラスを眺めてみると、少し前まで小雨が降っていたようである。天気予報を改めて確認すると、今日はどうやら曇りがちな天気のようなのだ。今日から三日間ほど天気が優れず、土曜日からは晴れの日が続くらしい。

今朝方見ている夢について少しばかり思い出している。夢の中で私は、実家のマンションに似た建物の屋上にいた。そこには偶然ながら両親もいて、そこで私たちは会話を楽しんでいた。屋上は開放感に溢れており、すぐ近くにある海を見渡すことができる。

その建物に隣接する形で、海岸に面した方向にもう一つマンションが建っている。そのマンションの屋上がなぜだか水浸しになっていた。両親の話によると、最近やって来た台風の影響でそのような状態になってしまったらしい。その話を聞いて、自分の足元を確認すると、こちらのマンションの屋上も少々水に濡れていることがわかった。その時私はなぜだか、水を吸収しやすい靴を履いていて、

---

靴に水が染み込まないように気をつけながら屋上を歩くようにした。しばらく屋上で過ごす、昼食の時間がやって来た。

両親が予約してくれたビュッフェ形式のレストランで一緒に食事をするようになっており、私たちはそこに向かった。レストランに到着してみると、客はアジア人が多いが、店で働いている人の多くはアメリカ人のようだった。彼らが話している言葉を聞いてそのように判断した。

店員に席を案内してもらった時、私は店内の様子を色々と観察することに夢中になっており、気がつくと両親とはぐれてしまった。はぐれてもすぐに両親を見つけ出すことができると高を括っていたのだが、そのレストランはとても広く、なかなか見つけ出すことができなかった。店員に名前を告げて場所を教えてくださいと思ったが、すぐに店員に聞くのではなく、店内を散策しながらまずは自力で両親を探すことにした。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は高校時代の二人の友人にインタビューをしていた。その二人はレスキュー隊の一員として、つい先日街のある建物で起きた爆発事件の際に救助活動をしていた。実際には、その日二人は仕事としてその建物にいたのではなく、休日の最中に偶然その爆発事件に巻き込まれ、そこで救助活動を行っていた。二人が爆発が起こった時の様子を生々しく語るものだから、話の臨場感に圧倒され、恐怖感のようなものが湧いてきた。私は二人の話を聞きながら、彼らが今回の爆発事件を通じて軽度なトラウマを抱えることになったことを察した。そこで夢の場面が再び変わった。フローニンゲン:2018/10/31(水)06:19

### 3339. 今日の活動内容

いつもと同様に、今日も旺盛な探究活動と創造活動に従事していく。読書の仕方をあれこれと日々考えてきたためか、このところの読書はより実りあるものに変貌を遂げつつある。端的には、様々な書物を一日中読む中で、これまで以上に得るものが増えている実感がある。そうして獲得された知識が自分の身体知に少しずつ変貌を遂げている様子を見て取ることができる。

今日の読書においては、ジンメル“*The Sociology of Georg Simmel (1950)*”をまず読もうと思う。本書は分量もあり、全ての内容が自分の関心と合致するわけではないため、自分が読みたいと思う箇所を納得するまで読もうと思う。本書の初読を終えた後に何を読むかは未定であるが、その時に一

---

番読みたいと思う書籍を、とりあえずは書斎の机の上に積み重ねられた書籍の中から一冊選びたいと思う。

今朝方の日記で書き留めていたように、就寝前にパソコンを見ることをやめてから、睡眠の質がさらに向上したように思う。確かに早朝の寒さは日を追うごとに厳しくなっているが、それでも早起きができているのは睡眠の質の高さによるところが大きいだろう。

過去の日記を編集することは、昼食後に行う習慣となった。過去の日記の編集後、その日のメールの返信を行っている。企業に勤めていた頃は、頻繁にメールを確認することをしてきたが、そうしたことをするのは随分と前にやめている。メールを頻繁に確認することは集中力を極度に削ぎ落とし、自分の探究活動と創造活動の障害にしかならないからである。同様の理由で、ソーシャルネットワークの類は一切使っていない。本当はメールですらも使いたくはないのだが、そうもいかない事情があるため、今は一日に一度だけメールを確認するようにしている。それが昼食後のタイミングだ。

メールの確認はこれからも一日に一度だけにし、それを行うのは創造活動に適した朝を避け、昼食後の時間帯にする。一日の活動がこのように組織化されていくことによって、毎日納得のいく形で自分の取り組みに従事することが可能になり、それが日々の充実感を生み出しているようだ。

今日は午後に、散歩がてら街の中心部に買い物に行こうと思う。その際に、行きつけのチーズ屋に立ち寄り、ナッツ類とチーズを購入する。

今日は快晴というわけにはいかないだろうが、午後からは少しは晴れ間が姿を見せることに期待しつつ、その時間帯まで今日の取り組みに従事していく。旺盛な読書、日記の執筆、作曲実践、そして散歩が今日の活動内容となる。フローニンゲン:2018/10/31(水)06:33

#### 3340. 休息と目次学習

時刻は午前11時を迎え、今日のフローニンゲンはとても穏やかな雰囲気を出している。夜が明けた時から青い空が広がり始め、澄み渡った空が今もなお広がっていることを嬉しく思う。ここ数日間こうした空を見なかつただけに、その美しさは格別だ。

---

今日は六時から一日の活動を開始し、すでにジンメルの書籍と教育哲学に関する二冊の書籍に目を通した。しかしどうやら、連日読書に没頭していたためか、今日は学術的な活字世界から少し離れる必要があるのではないかと身体感覚が伝えてきた。無理にこれ以上活字と触れることをするのではなく、今日は作曲実践をいつもより多く行ったり、絵画鑑賞のように楽譜を眺めていくようなことをしたいと思う。

私は時々、学術研究に打ち込みすぎた時には、対象から一度離れ、画集を眺めることがある。これが気分転換及び脳の活用部位の転換を促すのか、画集を眺めた後には再び活字世界の中に深く入っていくことができる。今日はとりあえず活字世界から一旦離れて、ここ最近見ていなかった楽譜を本棚から引っ張り出し、それらを眺めることに時間を使いたいと思う。それに加えて、昼食後に仮眠を取った後には、散歩がてら街の中心部に買い物に出かける。今日は本当に散歩日和なのだから、この機会を逃さず、秋の深まりを感じながら散歩を楽しみたい。

今日はこれから昼食前の時間を使って、テレマンに範を求めて作曲実践を行う。楽譜を眺めることと作曲をすることは、活字世界にのめり込みがちな自分に調和をもたらしてくれる。

今から行う作曲実践では、何かしら新しいことを試したいと思う。新たな挑戦をすることにより、新たな気づきと発見を得ていく。日々の作曲実践ではとにかくその考えを忘れないようにしたい。

午前中に読んでいた書籍、“Modern Philosophies of Education (1962)”は幾分出版年が古いのだが、内容は大変素晴らしく、大きな感銘を受けた。特に、認識論と価値論の観点から教育哲学を深めていく際に、この書籍は今後も参考になると思った。書籍の内容のみならず、目次の活用方法について気づくことがあった。いつも私は、書籍を読み始める前に、丹念に目次に目を通すのだが、知らず知らず目次だけからでも多くのことを学んでいることがわかった。

目次というのは、その書籍の章のエッセンスが短いセンテンスでまとめられたものであり、目次の言葉を眺めながら、その章の内容について想像を膨らませてあれこれ考えたり、仮説や推論を立てることを行っている自分がいることに気づく。

確かに、時に目次の言葉からは想像できないような内容が本文の中で書かれており、それが面白いこともあるのだが、基本的には目次の言葉で自分の関心を引く章だけを読み進めるようにしてい

---

---

る。事前に目次を通じてあれこれと考えを巡らせることそのものが、自分にとっては随分と学びになっており、著者が展開している考えが自分が考えている内容とどれだけ合致するのか、あるいはどれだけ異なるのかを確かめるかのように書籍を読んでいくと、学びが多くなるのではないかと思う。

今日はおそらく書籍に触れることはもうないだろうが、明日から書籍を読むときには、目次との向き合い方をなお一層大切にしたいと思う。フローニンゲン:2018/10/31(水) 11:33